

審査の結果の要旨

氏名 児玉 佳一

児童が主体的対話的に学びあうために、一斉指導だけではなく、小グループやペア学習などの協働学習も含む授業が増加している。そのため、教師にも協働学習における指導や支援の専門性が求められる。本論文は、協働学習における教師の専門性を、実践的知識、授業認知、実践的知識の形成による専門性発達、の三観点から実証的に分析検討した論文である。論文は、全体で5部11章から構成されている。

第I部第1章では、協働学習研究と教師研究を展望し、協働学習における教師に着目する必要性を概括している。第2章では、協働学習研究における教師に関する先行研究を検討し、それらの多くで技術的合理性に基づくモデルで教師の専門性が検討されている点を指摘している。また、学習効果に関連する点だけではなく、日常文脈の中での教師の認知を分析し、省察的専門家としての協働学習に関する専門性を検討する必要性を指摘している。第3章では、上記2章の内容を踏まえ、①実践的知識の様相、②授業場面での実践的知識の活用、③実践的知識の発達の変容、の三点が検討課題となることを導出している。

第II部では、協働学習に関する実践的知識に関し、第4章(研究1)では、87名の小学校教師および83名の小学校教師志望の教職課程学生を対象に協働学習と教師の関与に関わる比喩生成課題を実施している。その結果、教職課程学生は学習者視点から可視的な「教師の役割」をイメージする一方、現職教師は「教師のあり方」や「求められる能力」といったメタ的な部分をイメージする等の相違を明らかにしている。第5章研究2-1では、81名の教師と48名の教師志望学生に算数科の場面想定課題を、研究2-2では87名の教師に国語科の場面想定課題を実施し、教職志望学生と現職教師との支援方略の相違、協働的な学習観が強い教師とそうでない教師との支援方略の相違を示している。

第III部では、実践的知識の活用について、第6章(研究3)では、小学6年国語科の授業への参与観察と再生刺激インタビューにより、学習形態の変更に関するモニタリングとサポートのあり方を事例的に明らかにしている。第7章(研究4)では、小学5年社会科調べ学習の授業における単元レベルのモニタリングとサポートに関して、単元の前半と後半で、教師はモニタリングの焦点を変えていること等を示している。

第IV部第8章(研究5)では、協働学習の熟練教師のライフヒストリーを検討し、第9章(研究6)では、その教師の指導を受けた新任教師のライフヒストリーから専門性発達過程を捉え、同僚教師からの実践知形成への影響の多面的あり方を明らかにしている。

第V部第10章では、上記6研究の知見を概括し、今後の課題と展望をまとめている。

本論文は、事例研究が主であるため知見の一般化には限界がある。しかし、協働学習に関する教師の専門性を解明する新たな研究方法を開発して新たな知見を示した点で当該分野への可能性を拓く独自性の有る研究であり、教育実践にも寄与すると評価できる。よって、本論文は、博士(教育学)の学位を授与するにふさわしい水準にあると判断された。